

ジェンダー・家族・亡命

— アンナ・ゼーガースの短編小説から —

松 永 美 穂

1. 亡命期のアンナ・ゼーガース

20世紀のドイツを代表する女性作家の一人であるアンナ・ゼーガース（1900-83）が、人生のちょうど半ばの時期に14年間に及ぶ亡命生活を送っていたことはよく知られている⁽¹⁾。1928年に『聖バルバラの漁民一揆』で鮮烈なデビューを飾った彼女は、裕福な美術商の家庭の一人娘として育ったユダヤ人であったが（本名はネッティ・ライリング）、ハイデルベルク大学でハンガリー出身のラズロ・ラドヴァニ（1900-78）と出会い、1925年8月10日に結婚している。ラドヴァニはハンガリーにおけるレーテ共和国の試みが潰されたためにドイツに来た亡命者であり、ゼーガースは第一次大戦後の政治的混乱のなかで、彼の影響を受けて共産主義思想に接近していく。結婚後、ラドヴァニはベルリンの労働者学校の校長として働くことになり、ゼーガースは子ども（1926年生まれのペーターと1928年生まれのルート）を育てながら作品を書き、1928年には共産党にも入党している。この年にハンス・ヘニー・ヤーンの推薦でクライスト賞を受賞し（対象作は『グルーベチュ』と『聖バルバラの漁民一揆』）、共産主義作家として次第に重要な役割を果たすようになっていくが、そのためにナチスにマークされてしまう。1933年1月のヒトラーによる政権獲得後、2月27日夜には国会議事堂放火事件が起こって多数の共産党・社会民主党メンバーが逮捕・尋問されているが、ゼーガースとラドヴァニもこのときに身柄を拘束され、釈放後亡命生活に入っている。当時息子のペーターは猩紅熱でサナトリウムにおり⁽²⁾、娘のルートは祖父母がいるマインツに滞在中だったが、子どもたちはいったん祖父母の保護下に入り、ストラスブールで両親と合流し、一家はパリで亡命生活を開始する。ゼーガースの両親もやがてフランスに亡命するが、父親は1940年に病死、母親は1943年にアウシュヴィッツで亡くなっている。ゼーガースは亡命中も活発に反ナチ運動に参加し、作品も書き続け、1939年には代表作『第七の十字架』を完成。1940年9月にはドイツによるパリ占領を受けて南仏に逃れ、1941年3月に船でマルセイユを離れ、6月にニューヨークのエリス島に到着、さらにキューバなどを経てメキシコに亡命した。ゼーガースはメキシコ・シティで「ハインリヒ・ハイネ・クラブ」を設立。亡命者のネットワークを作って活発な活動を続けたが、1943年6月に交通事故で重傷を負い、長期の療養の後、ようやく回復した。戦後、東ドイツへの帰還は1947年である。その年にビューヒナー賞を受賞、

それ以降は東ドイツの看板作家として活動した。

ベルリンの壁崩壊を見ずに亡くなったゼーガースの死からすでに20年以上が経つが、東の体制派作家と見なされ、西では過小評価を受けてきたゼーガースの生涯と作品をあらためて見直そうとする動きが起こっている。1990年以降はゼーガース作品の再版が相次ぎ、書簡集や浩瀚な伝記も出版され、生前未発表だったいくつかのテキストも公表された。ベルリンの「アンナ・ゼーガース記念館」⁽⁶⁾は、ゼーガースが長らく暮らしていたアードラースホーフの住居をそのまま使っているが、記念館に本部を置く「アンナ・ゼーガース協会」も活発な活動を行っており、年会誌「アルゴ船」が発行されている。

本論文では、日本であまり知られていないゼーガース亡命中のテキストや、戦後すぐに書かれた短編から女性に関わるものを取りあげ、そこに描かれている家族像とジェンダー観を分析してみたい。

2. 男装した夜警 —— 「レンデルと呼ばれた男」

アレクサンダー・シュテファンは、“Anna Seghers im Exil”⁽⁴⁾において、FBIに残されていたアンナ・ゼーガース関連の資料を紹介するとともに、1940年にバーゼルのNational-Zeitungに掲載されて以降行方がわからなくなっていたゼーガースの短編「レンデルと呼ばれた男」と、同じ題材についてそれ以前に構想されたいらしい2つの短いテキストを再録している。これらのテキストはニューヨークのMoMA (Museum of Modern Art) のなかにあるハンス・リヒター・アーカイブに収められていたもので、ゼーガースの戦後の証言によれば、スイスにいたハンス・リヒターと共同で映画のシナリオを書く話があり、映画の原作としてゼーガースが1938年ごろ送ったものだったらしい。

興味深いのは、ブレヒトも同じ題材で短編を書き残していることだ。この2人の作家はどちらも新聞記事に取材しているらしいが、2人が目にした記事が同じものだったのかどうかは判断が難しい。ゼーガースは1938年ごろパリでブレヒトに会い、その際に自分がハンス・リヒターのために新聞記事にもとづいた短編小説を書いた話をしたらしい⁽⁵⁾。ゼーガースはブレヒトがその話を聞いて彼なりのバージョンを創作したと考えたようだが、アレクサンダー・シュテファンは、ブレヒトのメモのなかに、すでに1930年代前半にこの事件に関する記述がある、としており、取材源は別である可能性がある。

ここで、ゼーガースが書いた3つのテキストと、フリードリヒ・コーナー、ハンス・リヒターが手を入れた映画シナリオ、ブレヒトのテキスト、そして2つの新聞記事を比較してみたいと思う。

一人の女性が死んだ夫の代わりに男装して職につき、一定期間働き続けた（周囲の人々も男装を見破れなかった）というのが、ゼーガースとブレヒトのテキストに共通するストーリーである。

長い失業生活の後によく手に入れた職場を失って極貧に落ちるよりは、回りを欺いてでも職を確保し、子どもを養っていかなければならない、という切実な気持ちが背景にはある。その際、男装した女性には、妻の役を演じて協力してくれる女性がいたことになっている。また、男装が露見するきっかけとして工場の事故があったことも共通している。しかし、それぞれのテキストの雰囲気はかなり違っているのである。

まず、ゼーガースがフランス亡命中に書いた最初のテキスト（Aテキストとする）を見てみよう。タイトルは“Der Vertrauensposten”（重要な職務）。執筆時の住所 52, Rue Gay Lussac に、ホテル名 Hotel de l'Avenir が添えられている。このバージョンでは、病死する夫にフランソワ、残された妻カタリーナを気にかける門番にピエールと、フランス風の名前がつけられている。ただし事件の舞台は、ライン地方の工業都市とされ、第一次世界大戦後間もない時期に設定されている。文章はすべて現在形で、ひとまずの覚え書きとしてストーリーを記述したような体裁である。そのストーリーによれば、カタリーナはようやく就職の決まった夫フランソワが急死した後、男装して夫の書類を持参し、工場の夜警として働き始める。カタリーナの工作中、妻として家庭で子供の世話をし、家事をこなすゾフィーは、もともと列車のなかで、任地へ赴く途中のフランソワに出会ったに過ぎない。フランソワが倒れるのを目撃し、彼と一緒にいた幼い子どもたちを、宿で夫と子どもを待つカタリーナのもとに連れてきたのである。職探しをしていたゾフィーは、そのままその一家の主婦役としてとどまり、男装したカタリーナを支える。しかし、若い工員の一人ゲオルゲがゾフィーに恋をし、ゾフィーもゲオルゲを思って苦しむことになる。こうした成り行きの後、工場で爆発事故が起こり、気絶したカタリーナは病院の女性病棟で目を覚ます。しかし、近所の人々も工場の人々も、子どもを養うために男装して夜警を勤めたカタリーナの勇氣に感動し、ピエールは警官に向かって、「彼女たちをそっとしておいてやれ。勇敢な女性たちだし、誰にも悪いことなどしていないのだから」(77) と言うが、これは「その路地に住む人々みんなの意見でもある」(77) と書かれている。カタリーナは失職しない。ただ、自ら職をピエールに譲り、ピエールと再婚する。ゾフィーはゲオルゲと結婚するが、カタリーナから「いろいろありがとう」(77) と感謝されると、「当然のことをしたまでよ」(77) と答える。

このバージョンでは、2組の男女がそれぞれの相手と結婚もしくは再婚し、ハッピーエンドとなる。また、男性の職業と見なされていた夜警として女性が男装し働くことに関して、子どもを養うという現実的な理由が示されており、特に否定的な見解は示されないが、再婚したとたん、外で働くのは再び夫の役目となり、妻は家にとどまる。夫の不在は再婚相手の登場によって埋められ、男女の役割は明白に分けられるのである。

“Der Vertrauensposten”と名づけられたもう一つのバージョン（Bテキスト⁶⁾では、カタリー

ナは再婚しない。カタリーナの妻役を果たす女性はマリーと名前が変えられている。このテキストでは、死んでしまう夫には名前が与えられていない。彼は5年間も失業していたことになっており、ようやく手に入れた夜警の職が、一家にとってどれほど重要だったかがよくわかるようになっていく。また、マリーはゲオルゲを好きになるが、カタリーナとの「パンで結ばれた結束」(80)は固く、恋愛によっても揺るがない。おまけに、ゲオルゲはそうこうするうちに失業してしまうのである。

このバージョンでも最後には事故が起こって男装がばれてしまうが、カタリーナは再婚せず、夜警の職は失うものの、掃除婦として工場にとどまることを許される。支配人たちは、「あなたには重い仕事ではなく、軽い仕事を与えましょう」(80)と言うが、「軽い仕事に使う道具は次のようなものだった。バケツ、ほうき、雑巾。カタリーナはぞっとした。それでも彼女はその仕事を引き受け、道具をつかんで床をこすった。子どもは子ども、パンはパンだったからだ」(80)

男装がばれてもカタリーナは軽蔑されない。それどころか、逆に以前より尊敬されるようになる。労働者たちの「俺たちだったらあんたにもっと別のポストを与えるんだがな」(80)という言葉でこのテキストは終わっている。女性の家庭外での労働はここでは否定されない。しかし、夜警は男性の仕事として、カタリーナが女性であることがわかった瞬間に取り去られる。このテキストでは、Aテキストにも挿入されていた泥棒のエピソード(工場に夜間泥棒が入るが、カタリーナが撃退する)がより詳しく描写されているが、カタリーナがその際に銃を使用したことも記されており、夜警が危険な仕事であることが強調されている。

Aテキスト、Bテキストはそれぞれ2〜3ページの短いものだったが、「レンデルと呼ばれた男」(Cテキストとする)は22ページあり、短編小説としての完成度は高くなっている。夫の名はヘルマン、妻はカタリーナ。ヘルマンは1926年から4年間失業していたとされ、その間に何度か日雇いにつくことはできたがそうした仕事さえ数少なく、あとは外で歌ったり、チョークで道路に絵を描いたりして小銭を稼いでいたことになっている。友人の紹介で職を得た喜び、夫が急死した際の妻の驚愕などが詳しく描写される。夫の名を名乗って夜警の仕事に就く、というカタリーナの決意は次のように記されている。「心や肩や顔を強張らせつつ、彼女は再び自分を引き戻そうとする、何百万という男や女たちと同じ失業状態から身をもぎ離れた。そして、そこから抜け出すためのたった一本の細く恐ろしい道を歩みだしたのだ。それは一度きりの、彼女だけに開かれている道だった」(62)

Cテキストの特徴は登場人物、ことにカタリーナの心理が細かく描かれていることだ。男装によって失われたのが彼女自身のアイデンティティであったことも明らかにされていく。たとえばかつての隣人がレンデル家を訪ねてきたときに妻役のマリーが言う「カタリーナ・レンデルは死にました」(66)という言葉。あるいは誰もいないときに鏡を見るカタリーナの気持ち。「そこで

カタリーナは、自分の偽装がどんなに恐ろしいものであったかを理解した。いまになって、誰をこれほどひどく欺いたのか、ということも理解した。つまり、一番欺かれたのは彼女自身だったのだ」(70)

カタリーナはワンピースを着て外出し、ダンスに誘われる。Cテキストにおけるカタリーナは、男装がもたらす心理的矛盾にも苦しみ、自分がもとの女性に戻れるのかどうかをこうして確かめようとする。

しかしCテキストではA・Bテキストと違って悲劇がきわだつ結末になる。工場の事故でカタリーナは同僚を助けようとして重傷を負い、結局死んでしまうのだ。そもそもテキストの冒頭が、この事故と死の場面から始まっている。なぜこの女性が男装しなくてはならなかったのかをさかのぼって説明する形で物語が進んでいくのである。事故に遭い、担架に乗せられたとき、彼女が女性であることが初めて周囲にわかる。人々は驚くと同時に、カタリーナに対して畏敬の念を抱く。マリーと子どもたちがその後どうなったかは語られない。ただ、マリー自身は工員のゲオルクと既に恋仲になっており、妻役を演じることに耐えられなくなっている。カタリーナがいなくなれば、マリーは何の障害もなくゲオルクと結婚できるのである。Cテキストではカタリーナの払った犠牲の大きさが強調されると同時に、マリーの方も女性としての自己実現に悩む姿が描かれる。

ゼーガースのCテキストにもとづいてハンス・リヒターとフレデリック・コーナーが書いたと考えられる映画のシナリオは、「Anna Seghers im Exil」においては抜粋の形で紹介されているためA・B・Cテキストとの全体の比較はできないが、カタリーナが男装を始める場面と、最後の事故の場面は収録されている。それによれば、カタリーナは夫がまだ活着しているうちに、自分の代わりにしばらく勤めてくれという夫のたつての願いを受けて男装をしたことになっているが、当初は男らしい立ち居振る舞いができず、夫のアドバイスを受けながら次第に男性らしくなっていく。また、最後の事故では彼女は致命傷は受けないが、衛生係の男性が彼女の上着を脱がせようとし、女性であることに気づいてしまう。このことを支配人に報告しなくてはいけない、という衛生係の言葉を老人がさえぎり、レンデルの勇敢な行為によって第7坑道（ここでは勤務先は鉱山である）の全従業員が救われた、レンデルはすばらしい仲間て立派な男だ、と報告すれば、それ以外には何も言う必要はない、と決めつける。映画シナリオではカタリーナは命をとりとめるだけでなく、同僚たちの暗黙の了解のもと、その後も男として働き続けたであろうことが暗示されている。

これらA・B・Cテキストおよび映画のシナリオは、同じ題材にもとづいていながら結末が大きく変えられている。ゼーガースが完成稿の形で残したCテキストがもっとも悲劇的・悲観的で

あり、主人公の女性としての心理描写に紙幅が割かれている点は注目に値するだろう。ここで、ブレヒトが同テーマにもとづいて執筆した散文テキスト「職、もしくは額に汗したままでパンを食べるなかれ」を見てみたい⁽⁹⁾。肋膜炎で急死した夫の代わりに妻が男装して働き始めたというできごとを、ブレヒトは1927年のマインツにおける事件として叙述している。ブレヒトのテキストでは登場人物にファーストネームはなく、姓のみが——主人公夫婦はハウスマン、男装するハウスマン夫人の妻役を演じる女性はライトナー——記されている。ハウスマン夫人は夫の死後、夫に警備員の仕事を紹介してくれた友人の立ち会いのもと、男としての振る舞い方を練習し、職につくことになっている。そうして周囲に失業の嵐が吹き荒れるなか、4年間もライトナーと偽装夫婦として過ごしたとされ、「勇気や体力、思慮深さなどは、生活の糧を得るためとなれば男であっても女であっても発揮できるものなのだ」(99)「数日も経たないうちにこの女性は男になった。男が何千年もかけて男になったように、つまりは生産過程によって」(99)との見解が示される。4年後、工場の事故の際にハウスマンは気絶し、女であることが露見して職を失う。「その職は、空きを待っており、出生証明の際にチェックされる例の器官を両足のあいだにぶら下げている無数の人々のうちの一人に与えられた」(100)という皮肉な記述があり、失職後のハウスマン夫人がしばらくのあいだ郊外の居酒屋で従業員として働いたことが語られる。その店には彼女の夜警姿の写真が飾られ——そのなかには明らかに事件発覚後に撮影されたと思われるものもあったと語り手は述べる——「ボウリングを楽しむ人々のあいだで怪物として話題になった」(100)。ただし、その後彼女の消息は途絶えてしまうのであり、ブレヒトのテキストにおいては、多数の失業者のなかに埋没していく彼女の匿名性が強調されているといえるだろう。「セツァンの善人」で搾取を逃れるために男装せざるを得ない女性を描いたブレヒトは、貧しい女性たちがおかれた立場の弱さをよく理解していた。生き延びる手段としての男装を、彼は悲劇や道徳的退廃としてではなく、むしろたくましさとして受けとめている。

アレクサンダー・シュテファンは"Anna Seghers im Exil"において、ゼーガースとブレヒトが目にした可能性のある新聞記事も紹介している。1932年8月22日のMainzer Volkszeitungで、9年間男装して警備員をしていた女性が公文書偽造・偽証罪などで禁固1か月の刑を言い渡された裁判について報じるものである。ここで男装したとされる女性と、ゼーガースやブレヒトのテキストの主人公とのあいだにはいくつかの大きな違いがある。まず、新聞記事の女性(マリア・アインスマン)は夫と死に別れておらず、離婚したのみである。また、妻役的女性(ヘレーネ・ミュラー)と一緒に育てていた2人の子どもは、マリアではなくヘレーネが生んだ子どもとされている。男装の動機は、したがってゼーガースやブレヒトが描いたほど切羽詰まったものではなかったのかもしれない。ただ、法廷での受け答えでは「生活が困窮していたことと、男性の方が就職のチャンスがあると考えたこと」(120)が男装の動機として挙げられており、生活のためと

いう事情は変わらないようだ。法廷ではマリアとヘレーネが同性愛者ではないのかということがしつこく問いただされたようだが、2人はこの問いには否定的な返答をしている。また、新聞記事の調子には2人を揶揄するような面も見られるものの、「今日再び頻繁に耳にするようになった女性の劣等性や無能という言説を、ここでマリア・アインスマンとその女友だちが示した以上に明白に打ち破ることはできないだろう」(118)というように、男装して男と同等に警備員や機械工の仕事をしたマリア・アインスマンの「勇敢さ」を肯定的にたたえる文章も見られる。ただし、あくまで裁判の記事であるので彼女たちがその後どうなったかということとはわからないし、マリアも偽装がばれた時点で警備員の職を失ったことはほぼ間違いないだろう。

シュテファンは1932年発行の“Das Buch für Alle”からも数行の記事を引用しているが、そこにはマインツの工場で12年間夜警を勤めていた女性の話が出てくる。彼女は別居した夫の書類を使って就職し、12年のあいだに女性との結婚の届け出もしており、「妻」の連れ子2人の父親役も果たしていたようだ。この記事は短く、当事者も匿名である。

夜警事件を伝えるさまざまなテキストの比較にページを割いたが、本論文における関心の中心であるゼーガースのテキストでは、自らの性を偽って仕事に就くことが悲劇ととらえられ、そうせざるを得なかった女性の心理が細かく描写されていた。(この時点のゼーガースには、男女の役割分担を疑問視する意識はない。むしろプレヒトのテキストや新聞記事の方が、男装女性が夜警を立派に務めたことで女性にも男性と同等の体力と勇気があることが証明された、ととらえ、ポジティブに評価しているように思われる。) また、どのテキストもワイマール共和国末期の大量失業という事態を背景にしているが、社会批判的な視点はプレヒトに最も強く見られ、ゼーガースのテキストには特別な決断へと追い込まれた個人の不幸、という解釈が強いように感じられる。ただしゼーガースでは、主人公の男装露頭後のやりとりなどを見るかぎり、A・B・Cいずれのテキストにおいても、労働者の連帯や貧しいものたちの助け合い、善意などに目が向けられているといえるだろう。

ゼーガースはA・Bテキストにおいて、聖書を引き合いに出している。「男は女の服を着るべきではなく、女は男の服を着るべきではない」。これは新約聖書の「コリント人への手紙」11章でパウロが書いている「男はだれでも祈ったり、預言したりする際に、頭に物をかぶるなら、自分の頭を侮辱することになります。女はだれでも祈ったり、預言したりする際に、頭に物をかぶらないなら、その頭を侮辱することになります」という箇所の要約と思われる。男女の性と服装の秩序の根拠が聖書に求められているが、主人公カタリーナは生きるためにそうした秩序にも逆らわざるを得なかった、ということになる。作品中ではカタリーナは示された聖書の箇所に対して、言葉少なに「わたしは子どもたちを養うためにこうしたのです」と答え、母としての愛がキリスト教的なジェンダー秩序を逸脱する行動をも正当化するように書かれている。

3. 「亡命生活における女性と子どもたち」——ゼーガースの死後発表されたテキスト

ゼーガースの死後2年経ってから出版されたゼーガースとヘルツフェルデの書簡集に付されて初めて公表された「亡命生活における女性と子どもたち」は、1938年にパリで書かれたと推測されている⁹⁾。このテキストは亡命中の女性や子どもたちがおかれた状況に思いを馳せ、語り手がパリで見聞したさまざまな亡命者たちを紹介するものだが、異国での亡命生活という緊張を強いられる事態のなかで女性たちが果たす役割や、たくましく育っていく子どもたちの様子が描かれている。「亡命」という状態は、ここでは世界史における民族移動や追放、従軍などという、歴史上、往々にして人間に強いられてきた意に染まぬ移動と同列におかれている。圧制を避けるための亡命もいまに始まったことではない。ゼーガースの筆によれば、家族ぐるみの亡命の場合、妻たちは夫のイニシアチブに従って行動するよう見えつつ、実際的な場面では男性以上に冷静に事態に対処していることがある、という。また、亡命の決断を迫られるような家族の場合、常に迫害の危険にさらされているわけだが、たとえ家族の一人、たとえば夫が逮捕や処刑によって欠けることになっても、反ファシズムの志は妻や子どもたちに継承されていく、というのがゼーガースの（希望を含んだ）信念であり、このテキストでも弾圧にくじけることのない数々の家族像が提示されるのである。

ゼーガースはここでも、具体例を挙げることによって亡命者の状況を描き出していく。ジルヴィア・シュレンシュテットはゼーガースが使用する「わたしたち」という一人称に注意を促している¹⁰⁾が、ここではパリにおける亡命者たちの緊密なネットワークが示唆され、亡命者の大きなグループである「わたしたち」が存在していることがうかがえる。ダメージを受け、崩壊の危機にさらされた個々の家族を大きく包み込むもう一つの家族として、亡命者の集団があり、受け入れ国の善意ある人々がいることが示唆されている。

従来、亡命者というと男性のイメージが強いかもしれないが、ゼーガースのテキストを読む限りでは単身の女性亡命者も少なからずいたようである。夫が政治犯としてドイツでとらえられ、処刑されてしまった人。誰もやりたがらない反ナチのピラ撒きを引き受けて強制収容所に入れられた女性。ゲシュタポが家宅捜索に来たことを大声で外にいる友人に知らせ逃がしてやり、自らは逮捕された女性。疲れてはいても、ナチスとの闘いの姿勢を崩さない前向きな女性たち、夫が殺されてもへこたれることなく演台に立つ気丈な女性たちの姿がここでは報告されている。故郷にいるときは扶養される立場だったが、亡命先では菓子作りの特技を活かして家族を養うようになった老女の話も紹介される。彼女は経済的な自立とともに政治思想にも目覚め、活発に集會に参加している。亡命はこのように、多くの女性たちの自立や自覚を促す結果ももたらしているのである。子どもたちも、言葉の通じないフランスの学校でいじめに遭うなど、苦労を重ねているが、大人よりもずっと早く言語を習得し、事態に適応できる柔軟性もある。ただし、亡命者

としてのルーツを忘れ去るべきではない、単にフランス人に同化することが望ましいとはいえない、とゼーガースはテキストのなかで主張している。亡命はあくまで一時的な状態としてとらえられ、帰国を視野に入れて待機し続ける人々の姿勢が示されている。戦争が勃発し、パリが占領され、亡命者たちがさらに遠い場所へと逃亡しなければならないのは、このテキスト執筆の2年後である。

このテキストには子どもたちが通う学校の様子も紹介されている。パリには多数の外国人がおり、亡命者だけが異邦人というわけではない。フランス人に混じってスロヴェニア人やポルトガル人、ポーランド人の労働者の子どもたちが通う学校がある。そうした学校に不安げな表情をした亡命者の子どもたちが溶け込んでいく様子が、暖かいまなざしを子どもたちに向ける校長によって語られる。あるいは、フランツとパウルという2人の兄弟が、両親の逮捕後、知人の助けを借りてソ連に亡命し、亡命者の子供のための学校に受け入れられる話が紹介される。共産主義亡命者の子どもたちが愛情を込めて世話をされ、最初はドイツ語で、ロシア語の習得後は2か国語で授業を受けるなど、配慮に満ちた学校教育の様子がいささかの理想化とともに語られるが、これを書いていたのは独ソ不可侵条約の締結以前であり、ゼーガースのソ連に対する信頼感がまだ揺らいでいなかったことがうかがえる。

ゼーガースと2人の子どもたちの亡命生活については、昨年出版されたゼーガースの息子ピエール・ラドヴァニの回想録⁽¹⁰⁾を通していくつもの新事実が明らかになった。ドイツではほとんど学校生活を送っていなかったピエール（ドイツ名ペーター）が、フランスの小学校で訛のないフランス語を身につけ、両親のための通訳をたびたび果たしたこと。ドイツ軍によるパリ占領後、ゼーガースと子どもたちは徒歩で南仏を目指すが、ドイツ軍にいったん追いつかれてしまうこと。ピエールとルートはその後メキシコでもフランス人学校に行き、高等教育もフランスで受けることになる。ピエールはフランス人と結婚し、現在もフランス在住、手記もフランス語で執筆している。一家4人で亡命したゼーガースだが、1947年の帰国時は一人きりだった。夫の東独到着は5年後、子どもたちは前述のようにフランスで高等教育を受けている。長期にわたる亡命はゼーガースの家庭をも否応なく変貌させていた。亡命5年目のパリで書かれたステイトメント「亡命生活における女性と子どもたち」は、こうした事情を踏まえつつ読むと、第二次世界大戦勃発前の時点における亡命者間の連帯感やあくまで前向きな姿勢がさらに際だってくる。

4. 母から息子へ、息子から母へ —— 「クリサンタ」と「アガーテ・シュヴァイカート」

女性を主人公にすることが少ないと指摘されている⁽¹¹⁾ゼーガースだが、戦後書かれた短編小説のなかには、女性を主人公にした作品が少なくないだけでなく、女性の名前をそのままタイトルにしたものもある。1998年にアウフバウ社からゼーガースの生誕百年を意識して出版された『女たちの話』というアンソロジー⁽¹²⁾には、苦難のなかにおかれた女性たちの決断をめぐる物語

が12編収められている。このなかから特に、女性の名前をタイトルにしている2編を取り上げた。

4-1. 「クリサンタ」

この短編の冒頭は、語り手が読者に話しかける形で始まっている。

「メキシコの人々がどんな暮らしをしているか、聞きたいの？ だれについて話しましょうか？」

(111)

語り手はまずイダルゴ、モレロス、ファレスなど、メキシコで英雄とされている男たちの名前を挙げる。いずれもスペインやフランスなどの植民地支配に抵抗して立ち上がった男たちだ。しかし、これらの人々の業績を簡単に紹介した後で、語り手は結論を下す。

「これらの男たちのことを話すつもりはないし、その後メキシコで暮らした他の偉大な男たちのことも話しません。彼らはヨーロッパではほとんど無名ながら、メキシコやその他の地域では偉人中の偉人に数えられているんですけどね。わたしはファレスのこともイダルゴのこともモレロスのことも話しません。クリサンタについて話します」(111-112)

歴史に名を刻んだ男性ではなく、貧しく報われることのなかった庶民の女性に光が当てられる。クリサンタの生活は悲惨だ。彼女の母は彼女を生んだ際に亡くなり、父親は誰なのかわからない。彼女は鉱山労働者のゴンザレス一家に育ててもらうが、16歳でその町を離れ、メキシコシティで暮らし始める。下宿をしてトルティーヤを作る店で働くが、最初の恋に破れ、投げやりになり、次第に身を持ち崩していく。最初の恋人ミゲルは社会正義に目覚め、自分たちの現状に満足できず、国を出ていってしまうのである。

クリサンタは誰の子かわからない胎児を中絶し、左官屋と同棲するがうまくいかず、ぎりぎりの生活が続けるが、知人の女性に見いだされて故郷の町に戻り、道端でオレンジジュースを売りながら、新たに身ごもった子ども——この子も父親が誰だかわからない——を生み、シングルマザーとして育てる。

冒頭にあげられている男性たちに較べると、クリサンタの人生はあまりにも惨めかもしれない。しかし、作品の終わり方は決して悲観的ではなく、クリサンタは未来に希望を持っている。クリサンタ自身は学業を続けることはできなかったが、これから生まれてくる「息子」（生まれる前からクリサンタのなかでは「息子」として夢想される）は「読み書きを学ぶこともできるだろう。大学にも行けるかもしれない。それどころか博士にだってなれるかも。ゴンザレスの親爺さんが望んでいるように、この世に生まれてくることさえできれば、何にだってなれるのだ」(138)

クリサンタの夢は、こうして次世代に託されることになる。それが母から娘、ではなく息子への夢の継承として描かれる点に、女性の自己実現パターンの少なさを感じさせられずにはいられない。また、クリサンタを連れずに出国してしまったミゲルは、最後まで悪者として描かれるこ

とはない。そこには厳しい現実のなかで理想を追求するためには個人の犠牲もやむを得ない、という暗黙の了解がある。ただクリサンタは、自分がもしもっと早く故郷に戻ってジュース屋を開いていたらミゲルの子供が生めたのではないかと、ほろ苦い後悔を引きずっているのである。

一方、孤児となったクリサンタを引き取って育て、後に窮状に陥る彼女を再び受け入れるゴンザレス家の人々の人間愛は、さりげない形で賞揚されている。最後の段落でクリサンタは、自分の原・記憶に残っている色はゴンザレス夫人が幼い自分を包んでくれていたおくるみの濃紺であることに気づく。無数の子どもを、血がつながっていない子どもたちも含めてその腕に抱き取り、育て上げていく民衆の母たち。彼女たちの道德規範は素朴なキリスト教信仰であり、その行動は人間らしい同情心から出たものである。冒頭に列挙される、植民地における抵抗運動の男性リーダーたちに、彼らを育てたに違いない無数の母たちが、こうして対置されることになる。

4-2. 「アガータ・シュヴァイカート」

1957～65年の作品として同じアンソロジーに収められている「アガータ・シュヴァイカート」は、息子の理想を受け継いでスペイン戦争に参加し、さらに新世界へと亡命する母親を主人公にした短編である。アガータはライン地方の小都市で生まれ育ち、裁縫用品を扱う店を母親から相続する。結婚し、息子が一人生まれ、その後寡婦となってからも店のおかげで何とか生計を立てることができ、息子を大学まで行かせることができた。その息子は大学町で共産主義者となり、ヒトラーの政権奪取後パリに亡命してしまう。店を切り盛りして息子に仕送りすることだけを考えてきた単純な母親であるアガータは、息子の思想をよく理解しているわけではないが、別離の寂しさと息子についての心配が募り、ついに彼をフランスに訪ねる決心をする。一世一代の大旅行をしてフランスに着いてみると、息子は国際旅団に参加してスペインに移動した後であり、息子の足跡を追うアガータは、国際旅団の基地で彼を待ちつつ、傷病兵の看護や洗濯などの仕事を引き受けて働き始める。そこまで追ってきても再会は結局ならず、息子の戦死の報が届くが、アガータにとってナチス・ドイツに戻ることはもはや問題外であり、彼女はそのまま国際旅団のために働き続け、スペイン市民戦争の敗北後は中米行きの船に乗り込むのである。この物語は語り手自身が1941年の春にアンティール諸島で難民のバラックにいる際に聞いた話であることが最後に説明される。前述のクリサンタは息子の将来に思いを馳せる若い母だったが、この作品ではせっかく教育を受けさせた息子をファシズムとの闘いで亡くし、老いて亡命者となる母の姿がクローズアップされている。しかも「彼女がまだ生きてるかどうかわたしは知らない。ここに書き留めたのはわたしが彼女から聞いた話である」(165)という結末の言葉も、アガータの末路について特に明るい希望を抱かせるものではない。ただ、「クリサンタ」の場合と同様、目に立つ働きをした運動のリーダーではなく、思想的には未熟であってもそれを支えていった無数の無名の女性にオマージュが捧げられている点に、女性たちに向ける共感が読みとれるだろう。

アンソロジー『女たちの話』には、逃亡する政治犯を終戦時まで地下室に匿い続けた女性を描いた「葦」という短編も収められている。両親を亡くし、兄が出征した後、一人で家を守り続ける未婚の女性マルタは若い政治犯と出会い、彼を守りつつ恋人のようにして暮らす。しかし終戦後、男はすぐにベルリンに発ってしまい、彼女に対してさまざまな援助を約束しつつも、別の女性と結婚し、最後には西側に行ってしまう。こうした面だけを見ると女性が利用され捨てられてしまう話のように思えるが、一方でマルタは政治犯を匿ったことを自分だけの秘密として心にしまい続け、同時に人間としても自立して、横暴な兄を説き伏せ、戦後の農業集団化を自覚的に受けとめていく。社会主義社会を支える一人となり、最後には戦争で妻を亡くした男と結婚し、幸せな家庭を築くという、ややプロパガンダ的な作品ではあるが、彼女を思想的に導く若い男が結局西に行ってしまう点には当時の苦い現実も反映されている。

ゼーガースの場合、女性を主人公とする物語のなかでは、父親（もしくは夫）の影が往々にして非常に薄い。男装夜警事件は子どもの父親の死によって引き起こされるし、クリサンタには父親はおらず、彼女が生む子どもの父親もわからない。アガーテ・シュヴァイカートの父についても作品中で一言言及されるに過ぎず、アガーテはその後結婚するものの、夫は間もなく死んで家庭はまた母子のみとなってしまう。マルタの粗暴な兄も、父親代わりにはなれない。そうした環境のなか、女性たちは自らの判断によって行動していくのだが、短編「身を寄せる場所」のように、夫には真相を告げないまま、政治犯の子どもを引き取って世話をする女性の話もある。『死者はいつまでも若い』でも、父親の死後生まれた息子が父親と同じ共産主義者として歩んでいくが、不在の父、その不在を埋めつつ息子を育てる母、親の意志を受け継ぐ（あるいは親を超えて世の不正に目覚める）息子、という図式がゼーガースの作品にはくりかえし現れてくる。

さらに言えば、これらの短編において社会の矛盾に目覚める男たちは一様に「去っていく男」たちでもある。しかし置き去りにされた女性たちは、去った男を恨まず、日常生活のなかで——そうとは気づかずに、自らの意志で——いなくなった男たちの思想を実践していく。よく言えば健気、悪く言えば男にとって都合のいい女たちなのかもしれないが、雄弁な男たちよりも草の根の女性たちに対して示されるゼーガースの信頼は、彼女自身が生涯フェミニズム思想に接近することがなかったにもかかわらず、その後1970～80年代に盛んになる、ドイツ文学における女性史発掘のプログラムを先取りしているようにも見えるのである。この点についてはいずれまた論じたい。

注

この論文は、早稲田大学特定課題研究2003A-524「亡命の諸前提—女性作家の亡命と、亡命先での活動について」

における研究の成果にもとづき執筆したものである。

- (1) ゼーガースの伝記的事項については Christiane Zehl Romero: *Anna Seghers* (Rowohlt, 1993) を参照している。
- (2) Pierre Radvanyi: *Jenseits des Stroms* (Aufbau-Verlag, 2005) によれば、彼は当時 Kinderheim にいた、とされている。
- (3) 記念館の住所は Anna-Seghers-Strasse 81, 12489 Berlin-Adlershof である。なお、この記念館の研究員であり、最近のゼーガース研究についていろいろとご教示をいただいた Dr. Monika Melchert には、この場を借りてお礼申し上げたい。
- (4) Alexander Stephan: *Anna Seghers im Exil* (Bouvier, 1993)。この本には亡命中のゼーガースに関する FBI 資料を始め、著者がアメリカ合衆国で発見した貴重な資料が紹介されており、興味深い。なお、以下この本からの引用は本文中の () 内の数字によって引用ページを示す。
- (5) ebd. S.109 参照。
- (6) このテキストは „Neue Deutsche Literatur” 1978年5月号にも収録されている。
- (7) Alexander Stephan, S.97 以降。
- (8) ARGONAUTENSCHIFF Nr.2, 1993 に収録されたテキストを参照。
- (9) Silvia Schlenstedt: Überlegungen zu Anna Seghers' „Frauen und Kinder in der Emigration”
In: ARGONAUTENSCHIFF Nr.2, 1993 参照。
- (10) Pierre Radvanyi: *Jenseits des Stroms*, Aufbau-Verlag, 2005.
- (11) Alexander Stephan, S.42 参照。
- (12) Anna Seghers: *Geschichten von Frauen*, Aufbau Taschenbuch Verlag, 2002. 以下、この本からの引用は本文中の () 内の数字によって引用ページを示す。